

菩薩道の実践（布施行）について

花 田 順 信
(佛敎大学助敎授)

一

仏敎原理の核心は慈悲にある。それは仏敎的実践の中核・基準であり、同時に仏性・仏敎そのものでさえある。菩薩行は、その人間的な担い手と実現過程、つまり、人間的実践の総体である。したがって菩薩とは、真理への目覚めを求めて努力する人という語源的な意味をもっているが、みずからが理想的な人間でありながら、完成にむかつて無限に内的充実と愛他的努力をつづける理想的・現実的な人間像にほかならない。⁽¹⁾

菩薩は大乗に帰依して仏陀たらんとして修行する者を指す。菩薩はいわゆる四弘誓願（衆生無辺誓願度・煩惱無尽

誓願断・法門無量誓願学・仏道無上誓願成）を発し、六度を求め、下衆生を化益し、長年月に数多くの修行段階を経て仏果を証得するものとして、阿羅漢や辟支仏以上とせられる。菩薩の行と願とはすべて利他本位であって、従って菩薩は普通上求菩提・下化衆生、または大道心成衆生と解せられている。

仏敎の使命は、仏陀の慈悲の精神にもとづいて、社会の人々がこの世に生きていく上の精神的物質的なあらゆる苦悩を除き、生活がより豊かに、より安らかになることを実現しようとする慈悲の宗教であり、救済の宗教である。したがってその慈悲の精神の発露するところ、人々の社会生

活の諸方面において、具体的に人々の貧窮・病苦・孤独・厄苦など救う救済活動と、人々の社会生活の便益、向上をはかるための土木、交通、住居などの社会公益事業との両方面が展開されてきたのである。

このような社会的救済活動は基本的には慈悲の精神、利他の精神によるものであるが、他面大乘戒（三聚浄戒）の成立である。この戒は仏教の一切の戒律の総要であり、総約であつて、大乘仏教を奉ずる者の生活を止悪・作善・利他の三に概括したものであるが、それは第一摂律儀戒、第二摂善法戒、第三摂衆生戒（または饒益有情戒）である。その第一は一切の悪をば決して為さざること。第二は一切の善は進んで行くこと。第三はあらゆる衆生を教化し、利導し、悪をやめ善を修せしめ、同じく仏道に入らしめんとすることである。⁽²⁾

またもう一つは原始仏教から大乘仏教に至るまでひきつづき強調されてきた福田思想によるものである。

二

福田の発達は、菩薩精神の高揚、すなわち四摂六度の行

願を果遂しようとする利他的慈悲の精神によつて、著しくその内容を深めてゆくことになった。ことに六度の最初にある布施行が、菩薩行の重要な修行徳目の一であつたから、福田と密接不離な関係をもつて大乘仏教の実践面を強調することになり、従つて布施行に対するもう一つの考察が精細を極め仏・菩薩の学として的大乗仏教が鮮明化されたのである。

布施行の根柢は、菩薩の利他の精神に在る。しかも、それは慈悲の行為の発露するところである。この慈悲と布施の実践が菩薩の必須要件とされ、具体的には、福田を媒介として菩提の資助たる根柢が示され得ることとなつた。

「優婆塞戒經」の中で、菩薩が自と他とを修莊嚴する修習について、それを二種に分け、かつ六度に配当している。すなわち、福德莊嚴（施・戒・精進）と智慧莊嚴（忍・定・智慧）とし、この二種莊嚴を可能ならしめる正因は、慈心と悲心であると説く（二莊嚴品第二十二）

「優婆塞戒經」は「梵網經」等の大乘戒をとく經典と共に、シナ仏教以来重要視されてきたのであるが、「同經雜品」に次の如く説いている。

「若し財・法・食に於て慳けんを生ずれば、当まさに知るべし、是の人は無量世に於て痴貧ちひんの報を得。是の故に菩薩は布施波羅蜜を修行する時、要かならず自利及び他を利益することを作なすなり。善男子よ、若し人、施を楽わがへば一切の怨讎おんしゅう悉く親想を生ず。自在ならざる者は皆自在を得。施の因果を信じ、戒の因果を信すれば、是の人は則ち施の果を成就することを得。」

「菩提心經論」にて布施の種類について次のようにのべている。

「云何ぞ菩薩は布施を修行するや。布施とは自利他利及び二俱利と為す。是の如く布施すれば、則ち菩提の道を莊嚴す。菩薩衆生を調伏せんと欲する為に苦惱を離れしむ。是の故に施を行す。

施を修行するとは己の財物に於て常に捨心を生じ、来求者に於て尊重の心を起すこと、父母、師長、善知識の想の如くす。貧窮下賤に於て憐愍を生ずること。一子の想の如くす。随所に須く与へて心喜んで恭敬す。是を菩薩初めて施を修するの心と名く。布施を修するが故に善名流布す。所生の処に随つて財宝豊盈なり。是を自利と名

く。能く衆生をして心に満足を得しめ、教化調伏して慳吝けんなからしむ。是を利他と名く。己の所修無相の大施を以て、諸の衆生を化して己の利と同じからしむ。是を俱利と名く。布施を修するに因つて転輪王位を獲得して、一切無量の衆生を摂受し、乃至仏の無尽の法藏を得しむ。是を莊嚴菩提の道と名く。施に三種あり。一には以法施、二には無畏施、三には財物施なり。以法施とは、人に受戒して出家心を修するを勧め、邪見を壞たんと為断常四倒。衆惡過患を説き、真諦の義を分別開示して、精進の功德を讃し、放逸の過惡を説く。是を法施と名く。若し衆生ありて王者師子虎狼・水火・盜賊を怖畏するあらば、菩薩見已つて能く救護を為すを、無畏施と名く。自ら財物に於て施して慳けんまず、上は珍宝・象馬・車乘・綈帛・穀麥・衣服・飲食より、下は麁搏一縷の縋に至るまで、若くは多く、若くは少なく、称求す者に意の所須に随ふて与ふ。是を財施と名く。

財施、復た五種あり。一には至心施、二には信心施、三には隨時施、四には自手施、五には如法施なり。

施すべからざる所に復た五時あり。理に非ずして財を求

めて以て人に施さず。物不淨なるが故に。酒及び毒藥は以て人に施さず。衆生を乱す故に。

罽羅機網は以て人に施さず。衆生を悩害する故に。刀杖弓箭は以て人に施さず。衆生を害する故に。音樂女色は以て人に施さず。淨心を壞つが故に。要を取つて之を云はば、法に如かざるの物は、衆生を悩乱すれば、以て人に施さず。

自余の一切は能く衆生をして安樂を得しむる者は如法施と名く。⁽⁴⁾

具體的な布施の実践について「優婆塞戒經」にて次の如く説く。

「善男子よ、無財の人の自ら財無しと説くは是の義然らず。何を以ての故に、一切の水草は人有せざる無し。是れ国主なりと雖も必ずしも施すこと能はず。是れ貧窮なりと雖も施すこと能はざるに非ず。何を以ての故に、貧窮の人も亦た食分有り。食し已れば器を洗ひ滌汁を棄蕩するに、食すべき者を施すも亦た福德を得。若し塵麤を以て蟻子に施すも亦た無量の福德を得。天下の極貧も誰れか当に此の塵許の麤無からんや。誰れか一日に三

揣の麤を食して命を全くせざる者有らん。是の故に諸人は応に食の半を以て乞ふ者に施すべし。善男子よ。極貧の人も誰れか赤裸にして衣服無き者有らん。若し衣服有らば豈に一縷を人に施して瘡に繫けしめ、一指許りの財を燈炷と作すこと無からん耶。善男子よ。天下の人誰か貧窮にして当に身無き者有らんや。其の身有れば他の福を作すを見て、身応に往きて助け歎喜して厭ふこと無きが如きも、亦た施主と名づけ亦た福德を得。⁽⁵⁾

「善男子よ、菩薩の布施は四惡を遠離す。一には破戒、二には疑網、三には邪見、四には慳悋なり。復た五法を離る。一には施す時に有徳と無徳とを選ばず。二には施す時に善惡を説かず。三には施す時に種姓を擇ばず。四には施す時に求むる者を輕んぜず。五には施す時に惡口にて罵らず。復た三事有り。施し已るも勝妙の果報を得ず。一には先きに多く心を発して後には則ち少しく与う。二には惡物を擇選して持して以て人に施す。三には既に施を行じ已りて心に悔恨を生ず。善男子よ、復た八事有り。施し已るも上果を成就することを得ず。一には施し已りて受者の過を見る。二には施す時に心平等な

らず。三には施し已りて受者の作すを求む。四には施し已りて喜び自ら讚難す。五には無しと説きて後に乃ち之を与ふ。六には施し已りて悪口にて罵詈す。七には施し已りて二倍を還さんことを求む。八には施し已りて疑心を生ず。是の如きの施主は則ち諸仏賢聖の人に親近することを能はず。⁽⁶⁾」

「善男子よ、有知の人、菩提を求むる時、設し財宝多からんも亦た当に是の如き医方を誦誦すべし。胆病の舍を作り、病に須ふる所を具へ、飲食・湯薬を以て之に供給せん。道路凹^{おうく}なれば平治して寛からしめ、刺石糞穢^{しやくふんえ}不浄を除去せん。嶮^{けん}処に須ふる所の若しは板、若しは梯、若しは縁、若しは索、悉く皆之を施さん。曠路^{くわうろ}には井を作り果樹林を種え泉^{せん}潢^{かう}を修治せん。樹木無き処には爲めに堅柱を畜へ、負担^{ふたん}の患^いう処には爲めに基^き埵^とを作らん。客舎を造立し諸の須ふる所の瓶^{びん}盆^{ぼん}・燭^{しやく}燈^{とう}・床^と臥^ふ・敷^ふ具^ぐを具え、息穢^{しやく}の流るゝ処には爲めに橋^{きう}墜^{たい}を作らん。津^{しん}濟^じ・渡頭^{とど}には橋船^{きうせん}板^{ばん}を施し、渡こと能はざる者には自ら往きて之れを渡さん。老小・羸瘦^{るいそう}にして筋力^{きんりき}なき者には自ら手をもつて携^{たづさ}え將^{まづ}りて過ぐることを得せしめん。路次に

は塔を作りて花果樹を種え、怖畏者を見れば輒^{たちま}ち救蔵を爲し、物を以て善語し捕ふる者を誘^{いよう}喻^うせん。若し行者の次いで嶮^{けん}処に至るを見れば、輒^{たちま}ち前きに扶^ふ接^{せつ}して嶮^{けん}を過ぐることを得せしめん。若し土を失ひ破亡せる人を見れば、宜しきに随ひて給与し善言^{ぜんげん}慰^い喻^うせん。遠行して疲れ極まるものには当さに洗浴せしめ、手足を按摩し施すに床座を以てすべし。若し床座無ければ草を以て敷^ふと爲す。熱時には以て扇^{あふ}ぎ衣裳^{いしやう}にて蔭^{かげ}を作り、寒時には火を施し衣服を温暖ならしめん。若しは自ら之れを爲し若しは人を教へて爲さしむ。販^{ばん}売^{ばい}市^し易^ぎは教へて平^{たい}に依らしめ小利^{せうり}を貧^{ひん}り共に相^あひ中^{ちゆう}欺^きすること無し。行路者を見れば道と非道とを示す。道とは所謂^{いふ}る水草^{すいそう}多^た饒^{ねう}にして賊^{ぞく}盜^{たう}有ること無きなり。非道には諸の患^{けん}難^{なん}多^たきを宣^{せん}説^{せつ}す。人の轉^{てん}量^{りやう}・衣裳^{いしやう}・鉢^{はつ}盂^むの朽^くち故^こく壞^{くわい}るゝを見れば、即ち爲めに縫^{ぬい}補^ほ・浣^{かん}染^{ぜん}・熏^{くん}治^ちせん。鼠^そ蛇^だ・壁^へ蝨^し・毒^{どく}虫^{ちゆう}の患^いひする有れば能く爲めに除遣^{てしやん}し、人に意の如く摘^{てき}抓^{しやく}耳^じ鉤^{こう}を施さん。招提僧物を縫^{ぬい}治^ち浣^{かん}濯^{たく}す。謂^いく坐臥^{ざふ}の具、廁上^{しじやう}に安置する淨水、澡豆、淨灰土等なり。若し自ら衣服・鉢器を造作せば先づ仏に奉上^{みじやう}し、並に父母・師長・和上をして

先きに一たび受用せしめ、然る後に自ら服せん。若し仏に上る者は花香を以て贖ふ。凡べて食噉する所は要らず先づ沙門・梵志に施し、然る後に自ら食せん。遠く至る者を見れば、濡言に問訊して浄水を以て身体を洗浴し、油を与へて足に塗り、香花・揚枝・澡豆・灰土・香油・香水・蜜毘鉢羅・舎勒・小衣を施さん。塗油を作す者は洗ひ已りて復た種々の香花・丸薬・散薬を以てし、飲食漿水は須ふる所に随ひて施さん。復た剃刀・漉水囊等、針縷・衣納・紙筆墨等を施さん。若し常に能はずば齊日に随ひて施さん。若し盲者を見れば自ら前んで手を捉り杖を施して道を示さん。若し財物・父母を亡失して苦しみ有るものを見れば、当に財を以て給し、善語をもつて説法し慰喻勸諫し、煩惱福徳の二果を善説せん。」

「若し窮して物無ければ、応に医方種々の呪術を誦し、錢湯薬を求めて須ふる者に之を施し、至心に病を瞻て將に養ひ療治し、財ある者を勧めて諸薬の若しは丸、若しは散、若しは種々の湯を和合せしむべし。既に医方を了せば遍く行きて看病し、方を案じて診視し、病の所在を知りて其の病む処に随ひて療治を為す。病を療治する時

は善く方便を知りて、不浄に処すと雖も厭心を生ぜず。病増せば増すと知り、損する時は損すと知る。復た能く是の如き食薬は能く病苦を増すを知り、是の如き食薬は能く病苦を除くを知る。病者若し病を増す食薬を求むれば、応さに方便して宜しきに随ひて喻して語るべし。無しと云うことを得ず。若し無しと云はゞ、或は苦を増すこと劇しからん。若し定んで死するを知るも亦た死すと云はず、但だ當さに教えて三宝に皈依し仏法僧を念じ勤修供養せしめ、為めに「病苦は皆是れ往世不善の因縁なり。是の苦報を獲たり。今當に懺悔すべし」と説くべし。病者聞き已りて或は瞋恚を生じて惡口罵詈するも、黙して之れに報ひず亦た捨棄せず。復た瞻養すと雖も慎しみて恩を責むること無し。差え已るも猶ほ見て後の勞復を恐る。若し平復して本の如く健なる時を見れば、心に応に喜びを生じ恩報を求めざるべく、もし其れ死し已れば為めに殯葬し、説法して知識眷属を慰喻すべし。病を増す食薬を以て人に施すことなく、若し病の差え已れば心に喜びとする施物は便ち之れを受け、受け已りて転じて余の窮乏の者に施すべし。若し能く是の如く瞻養

して病を治するは、当に知るべし、是の人は大施主にし
て、真に無上菩提の道を求むるものなり。」⁽⁸⁾

三

仏教社会事業が平等の慈悲という仏教の根本精神に立脚
していることは事実である。ここに仏教社会事業の在り方
とその特色が見出されなければならない。したがって、仏
教社会事業は、物的なものを中心として、富めるものから
貧しきものへ、強きものから弱きものへというような高下
の立場に立つ単なる救済事業ではない。仏陀の教えを自他
ともに信じ信ぜしめていくところの、自利即利他、利他即
自利の平等観によるものであり、社会事業は、そのまま自
己の仏道修行の実践道場でなければならない。即ち自己の
仏教的生活が他者への社会福祉活動となるということであ
る。この福祉活動は、精神的と物質的との二面を同時にも
っている。現実における人間生活がより文化的、より宗教
的ならしめられるのは、菩薩の慈悲と空観を根拠とする利
他の活動によるものである。したがって、菩薩にとって

は福田は無数にあるというべく、何らの功德を求めようと
する心をいだかず、ひたすら布施行を実践するものである
といえよう。

- 註(1) 「社会科学と現代仏教」 孝橋正一著、創元社、二六四頁
(2) 「大乘菩薩道の研究」 西義雄編、平楽寺書店、六七七頁
(3) 「優婆塞戒經第四雜品第十九」 国訳一切経律部十二、
一四一頁
(4) 「発菩提心経論上」檀波羅蜜品第四」 国訳一切経論集部六
一七〇頁―一七一頁
(5) 「優婆塞戒經雜品第十九」 国訳一切経律部、一四七頁
(6) 「同経」 第五雜品之余、一五五頁―一五六頁
(7) 「同経」 第五雜品之余、一六二頁―一六三頁
(8) 「同経」 同 一六三頁―一六四頁

参考書

- 「初期仏教と社会生活」 早島鏡正著 岩波書店
「大乘菩薩道の研究」 西 義雄編 平楽寺書店
「社会科学と現代仏教」 孝橋正一著 創元社
「社会福祉と仏教」 森永松信著 誠信書房